

## ワンポイント・ブックレビュー

駒崎弘樹著『働き方革命 - あなたが今日から日本を変える方法』ちくま新書（2009年）

著者は学生時代にITベンチャー企業を興し、その後NPOをつくり新たな事業をはじめ。 「社会を変える」仕事、人の役に立つ意味のある仕事を愛し、寝食を忘れてのめり込んでいった結果待っていたのは、ニューズウィーク誌「世界を変える社会起業家100人」選出など数々の受賞と、「無駄な時間恐怖症候群」「常時多忙症候群」といった「病気」だった。それは、一方ではうつ病などの“メンタル”に至る（または至らせる）道であり、他方ではパートナー（配偶者）の「可能性を殺す」ワークライフ・インバランスである。

著者の懸念や危機感は、アメリカで受けた研修によって「方法」を与えられる。ライフビジョンを描き、具体的な目標を設定すること。なりたい自分、新しい自分の自己イメージをもつこと。ライフビジョンの核には「働き方」のビジョンがある。著者は「働く」ことを金銭のための労働に限らず、他者への貢献全般へと拡張し再定義する。傍を楽にさせることこそ働くことの意味なのだ。他者に貢献するように働き方を変えることによって、社会を変えることができる。それが「働き方革命」である。

著者が設定した具体的な目標（ビジョン）の中には、職場にいる時間をそれまでの1日16時間から9時間にする、という項目がある。「定時退社経営者」を目指した著者のチャレンジがはじまる。

まずは6時に退社してみる。仕事内容を見直し、業務の仕組みを組み替え、生産性向上をはかる。自分の仕事だけでなく、職場全体の仕事の仕方を変えていく。そうやって新たに生まれた時間を、パートナーとの関係、家事、自分の身体（フィットネス）、地域へと「投資」していく。

経営者やそれに近い管理職、起業家、幹部公務員など、長時間働くことが当たり前になっている人たちがいる。その多くは、仕事にやりがいを感じ、意味や使命感を見いだしているのだろう（本書でも、ワークライフバランスを推進する霞ヶ関官僚自体が遅くまで家に帰らないで働いている矛盾がやんわりと指摘されている）。ある種のNPOで働く人たちや労働組合幹部の多くもこの範疇に入るだろう。

社会に役立つ仕事、人のためになる仕事はイコール大変な仕事で、長時間働くことになるが仕方がない（場合によっては低収入でも仕方がない）という常識があるのではないか。だが、仮に本人はハッピーだとしても、それは「傍を楽にさせる」だろうか。

著者のスタンスはまっすぐだ。なりたい自分になりたい、自らの望む働き方、生き方を手に入れたい。そのための方法はシンプルだ。目標を明確にし、できるところからやってみる。常識や固定観念は障害だが、取り除くことはできるし、取り除くと清々しい。新しいやり方は新しいエネルギーを運んでくるかのようだ。

著者が実行した仕事の「スリム化」「スマート化」は参考になる点が多い。それ以上に、パートナーやきょうだいとの関係を変えていく姿勢とやり方に感銘を受けた。仕事のやり方を変えること以上に、自分の考え方や人との接し方を変えるのは難しい、と考えがちだが、たぶんそれも取り除くことのできる固定観念の一つなのだろう。

将来共働きを考えている若い人、特に女性にお勧めの本である。もちろん、パートナー（候補）に読ませるための本として。（湯浅 論）